

## 『中山裕之先生：意外と知らないハチ公の真実～ハチ公の死因と犬の疾患の変遷』



つぎに、東京大学獣医病理学研究室教授で、動物医療センター長の中山裕之先生からのお話がありました。

「私は新潟出身なのですが、先ほどお話がありましたタマ公の故郷のすぐそばになります。新幹線の新潟駅を降りて改札を出たすぐのところにタマ公の銅像があります。脚が短くて胴が長めなのですが……。先ほどの林先生のお話にもありましたが、タマ公は二度も飼い主を雪崩の中から救い出したという、ハチ公よりずっと忠犬度の高い犬だと思います(笑)。タマ公の話をし始めたら 1 時間もあっという間になりそうなのですが、今日のテーマのハチ公の話をしていきたいと思います。」

ハチ公が亡くなったのは、1935 年(昭和 10 年)の 3 月 8 日、今から 83 年前のことになります。

「まだ東大の農学部が駒場にあった頃です。その時に獣医病理学研究室にいらっやいました山本脩太郎先生がハチ公を解剖されました。記録や写真などが残っていますので、今日はそれをみなさんにお見せしたいと思います。」

### ハチ公は長生きだった

ハチ公は 1923 年に秋田県大館市にて誕生。1 年経たないうちに東京帝国大学教授の上野英三郎先生に飼われ始めました。しかし翌 1925 年に上野教授が急逝してしまいます。

「上野教授が亡くなった後、ハチ公は毎日渋谷駅まで亡き教授を迎えに来ているという話が朝日新聞で“いとしや老犬物語”として紹介されました。1932 年のことです。この記事が一世を風靡し、ハチ公が 11 歳で死亡する前の 1934 年には、渋谷駅のハチ公像が完成しました。」

ハチ公は、渋谷の稲荷橋(現在の南口の方面)で亡くなっているのを発見され、同日の午後には駒場にあった東京大学農学部の家畜病理学教室にて解剖が行われました。解剖されたハチ公の標本は、長い間、中山先生の所属する病理学研究室の片隅に置かれていたそうです。

「ある時ふと、これは重要だと思ひまして、研究室前の廊下に飾っておくようにしました。その後、農学部の正門向かってハチ公の銅像の反対側に農学資料館ができましたので、そこに移動しました。農学資料館では飼い主である上野英三郎先生の銅像の隣に置かれていますので、資料館の中で先生とハチ公が再会を果たすことができたということになると

思います。」

病理学研究室で解剖した動物の記録は、1902年から100年以上にわたって残されているそうです。

「昭和の初め頃の1933年、ハチ公が亡くなる2年前の解剖記録からの数字ですが、当時の犬の寿命がどのくらいだったか推測することができます。解剖したとき、つまり死亡したときの年齢になるので寿命とイコールではないですが、だいたいの傾向はわかるかと思います。36頭の犬の解剖が行われていましたが、平均年齢は2.3歳でした。若くして死んだ犬が多いということです。」

当時はワクチンもなく、獣医療もあまり発達していなかったという時代背景があります。

「ちなみに現在はどうかという、2011年では13.3歳という調査結果がでています。昭和初期に比べると、5倍くらい寿命がのびているという状況です。」

### ハチ公の死因は？

「ハチ公の解剖記録を見てみますと、重要なポイントがいくつかあります。お腹の中に4リットル以上の水が溜まっていたこと、肝臓は固く腫れあがり、心臓の右心室が拡張していたと書かれています。」

世間ではよく、ハチ公は焼き鳥の串が胃に刺さって死亡したのだといわれたりもしていますが、それは本当なのでしょうか。

「確かに、焼き鳥の串のようなものが胃の中にあっただという記載はあります。ですから、ハチ公は焼き鳥を食べていたと思いますが、串が胃にささって穴が開いていたとか出血していたという記載はないので、それが死因ではないだろう、ということになりますね。」

拡張した右心室にはフィラリアがたくさん寄生していたそうです。

「しかしそれについては何も書かれておらず、おまけに診断名も書かれていませんでした。想像するに、昭和初期はどんな犬でもフィラリアが寄生していたため、フィラリアについては書くに足りないことだったのではないかと思うのです。実際にハチ公の心臓にはフィラリアが寄生していて、肝臓にはフィラリア症による肝線維症が見られます。ですので、ハチ公の死因としては、“フィラリア症による血液の循環不全”という診断名になるかと思います。」

フィラリアは蚊が媒介することで罹る病気です。

「フィラリアに感染した犬の血液を蚊が吸うとき、一緒に小さなフィラリアの幼虫、マイクロフィラリアも吸い込みます。そしてその蚊が別の感染していない犬を刺すと、その犬がマイクロフィラリアに感染するという感染環になっています。マイクロフィラリアが血流にのって心臓に行き、最終的に成虫になります。そしてオスとメスが交尾して新たにマイクロフィラリアが生まれ、再び蚊がほかの犬にうつしていきます。現在は蚊も減りましたし、フィラリアに効く薬も開発されましたので、フィラリアが原因で死亡する犬は少なくなっています。」

フィラリア症以外に、昭和初期のころの犬はどのような病気に罹って死亡していたのでしょうか。

「1933年の解剖記録では1歳以下が18頭、1歳以上が11頭いまして、そのうちフィラリア症で死んだのは1歳以下が1頭、1歳以上で10頭となっています。そのほかにはジステンパーや肺炎などの感染症が多く、1歳以下では15頭が罹っていました。一方腫瘍は1歳以上の犬1頭だけと、当時はがんで死亡する犬はほとんどいない状況だったことがわかります。」

2010年の解剖記録とそれを比較すると、明らかに数字が変化していることが分かります。

「2010年には38頭の犬を解剖したのですが、そのうち1歳以下は1頭だけ、ほとんどが10歳以上でした。フィラリア症やジステンパーはゼロ、腫瘍が22頭でした。80年の間に犬が罹る病気はこれだけ変化してきたということです。」

### ハチ公の死因にさらに迫る

「ハチ公の臓器を見ると、いつも不思議だなと感じていたことがあります。肺の一部にポコッと硬いところがあるのです。標本瓶から取り出してその部分を少し切ってみると、本来肺はスポンジのようなものなのですが、その硬い部分は緻密で周囲とは違うことが分かりました。」

そこで中山先生はその硬い部分の顕微鏡標本をつくり観察を行いました。2011年のことです。

「正常な犬の肺はスポンジ状になっていますので、空気の入る穴がたくさんあります。しかしハチ公の肺の白くて硬い部分は、空気の入るべきところがほとんど細胞で埋まっている状態になっていました。がん細胞だったのです。さらにMRIをとってみると、肺のいろいろな箇所にも腫瘍の病変が見られました。」

さらに心臓についても顕微鏡観察が行われました。

「正常な犬の心臓は細長い細胞がたくさん集まっているのですが、ハチ公の心臓は、本来の心臓の細胞とは違うもの、すなわちがん細胞が集まっていた。そして肺と同様に、心臓のMRIからも腫瘍の病変が広がっていることが分かりました。」

こうして、ハチ公の死後80年近い歳月を経て明らかになった、ハチ公の死因の真実は・・・

「フィラリア症であることは保存している標本を見れば一目瞭然なのですが、それに加えて、肺と心臓に悪性腫瘍があったということが明らかになりました。専門的には癌肉腫といわれるものです。ハチ公が亡くなる時はかなり辛い状態だったのではないかと思います。フィラリアが寄生して、お腹に水がたまっていて、さらに心臓と肺には腫瘍の病巣がありましたので、呼吸もままならなかったのではないかと思います。」

最後に、本日のまとめとして次のように述べられていました。

「ハチ公の死因はフィラリア症と肺と心臓の腫瘍であったということ。そして、昭和の初期は感染症のために1歳以下で死亡する犬が多かったのに対して、現在は10歳、15歳まで生きて、腫瘍で死亡するケースが多くなっています。人と犬の関係や飼育法の変化、獣医療の進展などにより、わずか80年ほどの間でも動物がかかる病気の割合はこんなにも変化するものなのです。」